

Ⅲ 特定動植物種の生息・生育環境調査

白山におけるカヤクグリの生息環境

上馬康生（石川県白山自然保護センター）

1. はじめに

カヤクグリは、繁殖期に本州、北海道、四国の主として亜高山帯から高山帯に生息している鳥で、日本固有の種として知られている。白山の高山帯を中心とする地域には、個体数の比較的多い鳥である。生態に関する研究では、海外で平地にいるヨーロッパカヤクグリについて、Birkhead (1981)、Davies (1992) などの婚姻システムに関する研究が多く発表されている。日本ではイワヒバリとの生態的分離について調べた古厩 (1983) と繁殖の概要についての松谷真輔 (1985) の報告があるくらいで、高山という調査の困難な場所であることや、目立たない鳥で関心が持たれにくいいためか、全国的にも調査のほとんどなされていない鳥の一つである。

白山においては、別山のチブリ尾根において繁殖期の鳥類調査の報告の中で、亜高山帯の優占種の一つになっていることが明らかとなっている (上馬 1985) が、他に報告はない。今回、白山における繁殖期の生息環境を中心に、営巣場所等繁殖についても明らかにするために調査した。

2. 調査方法

白山の登山道を歩きながら、歩道の両側に出現したカヤクグリを、個体数および確認方法 (さえずり・地鳴き・姿) の区別をしながら記録した。その際、個体がいた周辺的环境を記録するとともに、高度計により標高を記録し、また個体までの距離を 25 m まで、25 ~ 50 m まで、50 m 以上の 3 段階の区別をして記録した。特に営巣など繁殖に関する観察ができた場合は、その場所に立ち止まって、詳しい内容について記録するようにした。

調査した場所は 1996 年 7 月 18 日に加賀禅定道ハライ谷口から奥長倉避難小屋、7 月 19 日に奥長倉避難小屋から七倉山を経て岩間・楽々新道経由で新岩間温泉まで。7 月 24 日に別当出合より観光新道経由で室堂まで。同日に室堂から御前峰、お池めぐりコースを千蛇ヶ池まで。7 月 25 日に平瀬道の大倉山の標高 2000 m から室堂まで。同日に室堂から水屋尻経由で百姓池まで。7 月 26 日に室堂から千蛇ヶ池まで。同日に弥陀ヶ原からエコーライン経由で南竜道の分岐まで。8 月 6 日に市ノ瀬から別山・市ノ瀬道 (チブリ尾根) 経由で別山まで。同日に別山から南竜ヶ馬場、トンビ岩経由で室堂まで。8 月 7 日に千蛇ヶ池から中宮道の下り口 (標高 2590 m) までである。

3. 調査結果及び考察

調査によって出現したカヤクグリの記録の一覧を示すと表 1 のようになる。生息環境を

表1 カヤクグリの確認場所と植生

年月日	場 所	標高	数	環 境	主な木本
960719	加賀禅定道 奥長倉山	1740	s	ササ低木	ダケカンパ
960719	〃 滝展望台	2010	s	ササ低木	ハイマツ、オシラビソ
960719	〃	2030	f	ササ低木	ハイマツ、オシラビソ
960719	〃	2030	s	ササ草原	ハイマツ、オシラビソ
960719	〃	2040	s	ササ低木	ダケカンパ、オシラビソ
960719	〃	2040	s f	ササ低木	オシラビソ、
960719	〃	2100	s f	ササ低木	オシラビソ、ミヤマハンノキ
960719	〃 油池	2050	s	低木ササ	オシラビソ、ハイマツ
960719	〃	2070	f	低木	オシラビソ
960719	〃	2080	s	低木ササ	オシラビソ、ナカマト
960719	〃 長坂	2130	s f	低木ササ	ハイマツ
960719	〃	2130	c f	低木	オシラビソ、ダケカンパ
960719	〃	2180	s	低木	ダケカンパ、オシラビソ
960719	〃	2220	2 s f	低木ササ	ハイマツ、オシラビソ
960719	〃	2250	c f	低木ササ	ハイマツ、オシラビソ、ダケカンパ
960719	〃	2260	f	低木ササ	ハイマツ、オシラビソ、ダケカンパ
960719	〃	2300	s	ハイマツ	
960719	〃	2300	s	ハイマツ	
960719	〃	2460	s	ハイマツ	
960719	岩間道、清浄ヶ原	2320	s	ハイマツ	
960719	〃	2320	c	低木ササ	オシラビソ、ナカマト
960719	岩間道、見返坂	2300	s f	低木	ハイマツ、オシラビソ
960719	〃	2250	c	低木ササ	オシラビソ、ダケカンパ
960719	〃	2220	s	低木	オシラビソ、ダケカンパ、ハイマツ
960719	〃	2140	c	低木ササ	オシラビソ、ナカマト
960724	観光新道	2120	s	低木ササ	ハイマツ
960724	〃	2250	s	低木	オシラビソ、ナカマト、ハイマツ
960724	砂防新道、弥陀ヶ原	2320	s	低木ササ	ナカマト
960724	〃	2320	s	低木ササ	ハイマツ、ナカマト
960724	〃	2320	s	低木ササ	ハイマツ、ナカマト
960724	砂防新道、五葉坂	2380	c	ハイマツ	
960724	〃	2420	s	ハイマツ	
960724	室堂	2450	f	ハイマツ	
960724	室堂～御前峰	2470	s	雪田低木	ナカマト
960724	〃	2480	s	低木	ハイマツ、ナカマト
960724	〃	2490	s	低木	ハイマツ、ナカマト
960724	〃	2500	s	ハイマツ	
960724	〃	2520	s	ハイマツ	
960724	〃	2530	s	ハイマツ	
960724	〃	2610	c	ハイマツ	

年月日	場 所	標高	数	環 境	主な木本
960725	平瀬道	2200	s	低木草原	ハイマツ、ナカマト [°]
960725	〃	2280	s	低木草原	ナカマト [°]
960725	〃	2330	s	ハイマツ	
960725	〃	2360	s	低木	ハイマツ、ナカマト [°]
960725	〃	2390	s	低木草原	ハイマツ、ナカマト [°]
960725	〃	2430	s	ハイマツ	
960725	〃	2430	s	ハイマツ	
960725	〃	2430	s	ハイマツ	
960725	室堂～百姓池	2450	f	ハイマツ雪田	
960725	〃	2440	3 f	雪田ハイマツ	
960725	〃	2470	s	低木	ハイマツ、ナカマト [°]
960725	〃	2470	f	雪田ハイマツ	
960725	〃	2480	f	ハイマツ	
960725	〃	2480	f	低木雪田	ハイマツ、ナカマト [°]
960725	〃	2510	2 f	ハイマツ	
960725	〃	2530	s	ハイマツ雪田	
960725	〃	2540	s	ハイマツ雪田	
960725	百姓池	2570	c	ハイマツ雪田	
960726	室堂～千蛇ヶ池	2470	s	低木	ハイマツ、ナカマト [°]
960726	〃	2480	s	ハイマツ雪田	
960726	〃	2490	f	ハイマツ	
960726	〃	2500	s	低木	ハイマツ、ナカマト [°]
960726	〃	2500	s	低木	ハイマツ、ナカマト [°]
960726	〃	2510	s	低木	ハイマツ、ナカマト [°]
960726	〃	2520	f	低木	ハイマツ、ナカマト [°]
960726	〃	2600	f	ハイマツ	
960726	〃	2580	s	ハイマツ	
960726	エコーライン	2360	s	低木	ナカマト [°] 、ハイマツ
960726	〃	2350	s	低木	ナカマト [°] 、ハイマツ
960726	〃	2340	s	低木ササ	ハイマツ、ナカマト [°]
960726	〃	2340	s	雪田低木	ハイマツ
960806	チブリ尾根	2170	s	低木	ダケカンバ [°] 、オシラビソ
960806	〃	2210	s	低木	オシラビソ、ダケカンバ [°]
960806	御舎利山	2370	s	ハイマツ	
960806	御舎利～別山	2350	s	ハイマツ	
960806	南竜	2070	s	低木ササ	ナカマト [°] 、オシラビソ
960806	トンビ岩コース	2150	f	雪溪	
960806	〃	2380	s	ハイマツ	
960806	〃	2400	s	ハイマツ	
960806	〃	2420	s	ハイマツ	
960807	大汝峰雪溪	2610	3 f	雪溪	

s : さえずり c : 地鳴き f : 姿 ナカマト[°] : ウラジメナカマト[°] 雪田 : 雪田群落

表2 カヤクグリの繁殖に関する記録

年月日	場所と植生	内 容
96. 7.19	加賀禅定道長坂、標高 2220 m。 ハイマツ、オオシラビソの低木 林とササ原。	巣立ち雛と親鳥。
96. 7.19	加賀禅定道長坂、標高 2250 m。 ハイマツ、オオシラビソ、ダケ カンバの低木林とササ原。	巣内雛 2羽と親鳥。 巣は地上約 80 cmの位置のハイマツの枝に あり、内径約 5.5 cm、外径約 13 cm、高さ 約 13 cm。細い草の茎、葉、細い木の枝、 コケ類よりなる巣。
96. 7.25	お池めぐりコースの百姓池～水 屋尻の間、標高 2480 m。ハイ マツ林。	巣の存在の可能性。 ハイマツ林内へ出入りする親鳥。
96. 7.25	お池めぐりコースの百姓池～水 屋尻の間、標高 2510 m。ハイ マツ林。	巣内雛の声。 親鳥 2羽とハイマツ林内より雛の声。
96. 8. 7	大汝峰、標高 2610 m。雪溪上	巣立ち雛 2羽と親鳥。 親鳥 1羽が雪溪上で 2羽の雛に給餌。雛 は人が近づくと岩陰に隠れる。

明らかにすることが主目的であるので、個体の姿が見えているか、見えていなくても鳴いている場所が分かっている記録をすべて載せてある。ほとんどが距離 25 m 以内の記録であり、50 m を越える記録はなかった。これはカヤクグリは体が小さく色彩的に目立たないこと、また鳴き声も小さいことで、離れた場所の個体の確認が困難であることによる。

(1) 生息環境

記録できた場所の標高は 1740 m ~ 2610 m であり、2000 m 以下の記録は 1 例だけであった。今回の結果だけを見ると、カヤクグリは白山では概ね 2000 m 以上に生息しているように考えられるが、以前の調査で今回は出現のなかったチブリ尾根の標高 1750 m ~ 2000 m にも 2000 m 以上と同様に多く見つかっていること（上馬 1985）から、調査条件、特に調査時期の影響があると考えられる。標高の低い亜高山帯では高山帯に比べて繁殖時期が早いことが考えられ、今回行った 7 月中旬から 8 月上旬の調査時点では、カヤクグリの活動がすでに活発でなくなっている結果、記録されなかった可能性が高い。

生息環境としては、81 例中 2 例が雪渓上であった他は、すべて低木林か、低木を含む草原、ササ地、雪田植生であった。なお低木林としたのは概ね 3 ~ 4 m 以下の樹高の林で、その多くが 1 ~ 2 m 以内の樹高であった。中でもハイマツを含む低木林（36 例）、ハイマツ林（25 例）が多く、合わせると全体の 75 % を越える。雪田群落や草原（高茎草原）だけからなる環境には見られず、その中に少しでもハイマツ等の低木が入っていることが生息地の環境条件として必要であると考えられる。なお雪渓上に見られたのは、2 例ともそこで昆虫等の採餌中であった。

(2) 繁殖について

次にカヤクグリの繁殖に関する記録は、表 2 のように 5 例あった。営巣中の巣とその可能性の高い場所の確認が 3 例、巣立ち雛の確認が 2 例である。7 月 19 日に加賀禅定道で見つかった巣は、尾根筋のハイマツとオオシラビソの樹高 1 ~ 2 m の低木林内のハイマツの枝にあり、巣内には孵化後 1 週間くらいと推定される雛が 2 羽確認された。7 月 25 日には、お池めぐりコースの百姓池 ~ 水屋尻間のハイマツの純林の中で、2 か所に巣の存在がほぼ確実であることがわかった。一方は親鳥が一定の場所への出入りをしており、もう一方は親鳥のいる近くのハイマツ林のしげみから巣内雛と考えられる声が確認された。次に 7 月 19 日に加賀禅定道で見られた雛と考えられる個体は、尾羽など十分伸びきっていない羽根の状態や活発でない行動から巣立ち間もない雛と考えられた。また 8 月 7 日に大汝峰の雪渓上で見られた 2 羽の巣立ち雛も、約 2 時間にわたる観察の中でほとんど場所を移動せず親鳥の運ぶ餌を受け取っていた行動から、巣立ち後あまり日数がたっていないと考えられた。

4. まとめ

今年度の調査結果から、カヤクグリは、白山では標高 2000 m 以上の亜高山帯から高山帯にかけて広く分布していること、中でもハイマツ林かハイマツを含む低木林のある環境

にみられることが多いことが分かった。雪田群落や高茎草原の優先する植生環境にもみられたが、そこにハイマツ等の低木が含まれていることが条件となっていると推定された。次にカヤクグリの繁殖に関する記録として、営巢中の巣及び巣立ち雛の発見があった。

今回の調査では、育雛中であつたり巣立ち雛が見られるなど、すでに繁殖期の後半に当たっていたことから、来年度は調査時期を早めて生息環境の調査記録を増やすとともに、巣の発見に努め、営巢環境を明らかにできるようにしたい。

文 献

Birkhead (1981) The social behaviour of the dunnock *Prunella modularis*. *Ibis* 123, 75-84.

Davies (1992) *Dunnock behaviour and social evolution*. Oxford University Press, Oxford.

古厩昌幸 (1983) イワヒバリとカヤクグリの生態的分離について. *山階鳥研報* 15, 51-62.

松谷真輔 (1985) 鳥のお手伝いさん<カヤクグリ>. *続々野鳥の生活*, 79-83, 築地書館, 東京.

上馬康生 (1985) 白山チブリ尾根の繁殖期の鳥類. *石川県白山自然保護センター研究報告* 第12集, 31-39.